

## 自己有用感を高める学級活動の工夫

～学級生活上の課題を解決するための話し合い・実践を通して～

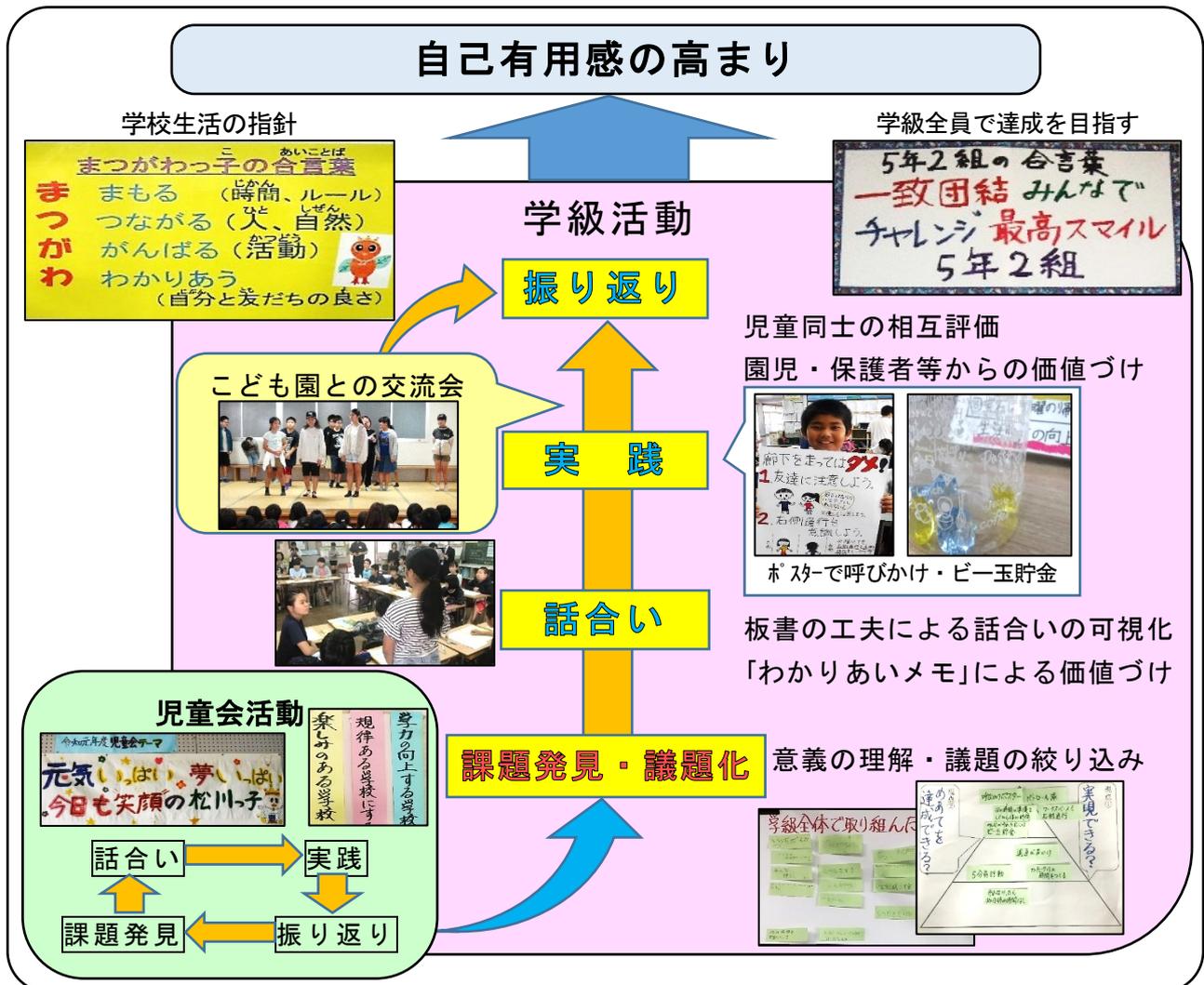
那覇市立松川小学校教諭 高野 亮

### 〈研究の概要〉

今の学校教育には、子供たちが今後の様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していけるように、資質・能力を確実に育成することが求められている。今回の学習指導要領改訂において、特別活動では、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせ、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して」資質・能力を育成することが示された。

本研究では、学級活動(1)において、児童が学級生活上の課題を主体的に解決するための議題化や話し合い、実践を通して、自己有用感を高める工夫について実践・検証を行った。児童会活動に取り組む視点から学級生活上の課題を考え、解決するよさを共有したことで、児童は課題を自分のこととして捉え、主体的に話し合い、実践することができた。また、話し合い実践を通して相手の考えや行動、発言を肯定的に評価する相互評価の工夫をしたことで、児童は「役立つ自分」を実感し、自己有用感を高めることができたと考察する。

### 〈研究のイメージ〉



## 目 次

I	テーマ設定の理由	41
II	研究目標	41
III	研究仮説	42
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	42
V	研究内容	42
	1 自己有用感を高める学級活動	
	(1) 自己有用感とは	
	(2) 自己有用感を高める学級活動について	
	2 学級生活上の課題を解決するための話し合い・実践	
	(1) 学級生活上の課題を切実感のある議題にする工夫について	
	(2) 課題を解決するための主体的な話し合い・実践にする工夫について	
	(3) 「役立つ自分」を実感するための相互評価について	
	3 話し合い活動における思考ツールの活用について	
VI	授業実践（第5学年）	46
	1 議題名「まつがわパワーアップ作戦に取り組もう ～『まつがわっ子の合言葉』の実行～」	
	2 議題選定の理由	
	3 事前から実践・振り返りまでの取組	
	4 本時の展開	
	(1) 本時のねらい	
	(2) 授業仮説	
	(3) 展開	
VII	結果と考察	47
	1 作業仮説(1)の検証	
	【結果】 【考察】	
	2 作業仮説(2)の検証	
	【結果】 【考察】	
VIII	成果と課題	50
	1 成果	
	2 課題と対応策	

《主な参考文献》

## 自己有用感を高める学級活動の工夫 ～学級生活上の課題を解決するための話し合い・実践を通して～

那覇市立松川小学校教諭 高野 亮

### I テーマ設定の理由

我が国は、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展、絶え間ない技術革新等により、社会構造が大きく急速に変化し、今後の予測が困難な時代となっている。学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極めた知識の再構成、目的の再構築ができるようにすることなどが求められている。そうした状況を踏まえ、新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することや、その際に各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせ、資質・能力を育むことが示された。

本校では、「主体的・対話的で深い学びの実現にむけた授業改善」について学級活動の研究・実践に取り組み、一定の成果を上げているが、本学級で児童質問紙調査を行ったところ、「学級や学校で役に立っている」「学校のきまりを守っている」と回答した児童の割合は57%という低い数値であった。このことから、児童に「役立つ自分」を実感させることや、学級・学校におけるきまりの意義を考え、守るための取組が必要であると考える。自分自身の指導を振り返ると、よりよい人間関係や学級への所属感を意識して、集会活動や異学年交流などに多く取り組んできた。しかし、児童に学級生活上の課題を見いださせることや、その課題を自分たちのものとして捉えさせ、解決するための話し合い・実践に主体的に取り組ませることは難しかった。そのため、学級生活上の課題を直接的に扱う議題では、教師主導になりがちで、児童の活動を価値づけたり、「役立つ自分」に気づかせたりする工夫が不十分であったと考える。

これらの課題を解決するために、児童が主体的に活動し、互いのよさや可能性を発揮しながら、集団や自己の学級生活上の課題を解決していけるようにする必要がある。具体的には、学級生活上の課題を見いだすために児童会活動の経験を生かすことや議題化するための工夫、その解決に向けて主体的に話し合わせる手だて、実践を可視化して価値づけ、児童が互いを認め合うような相互評価の工夫を行うことで、児童は「役立つ自分」を実感し、自己有用感を高められると考える。

本研究では、学級生活上の課題の発見・議題化、解決に向けての主体的な話し合いや実践、互いを認め合う相互評価について、意図的・計画的な指導を行うことで、児童が「役立つ自分」を実感し、自己有用感を高めることができると考え、本テーマを設定した。

### II 研究目標

児童の自己有用感を高めるために、児童会活動の経験を生かした学級生活上の課題の発見・議題化や、その解決に向けて主体的に話し合わせる手だて、実践を通して「役立つ自分」を実感する相互評価の工夫について実践的に研究する。

### Ⅲ 研究仮説

#### 1 基本仮説

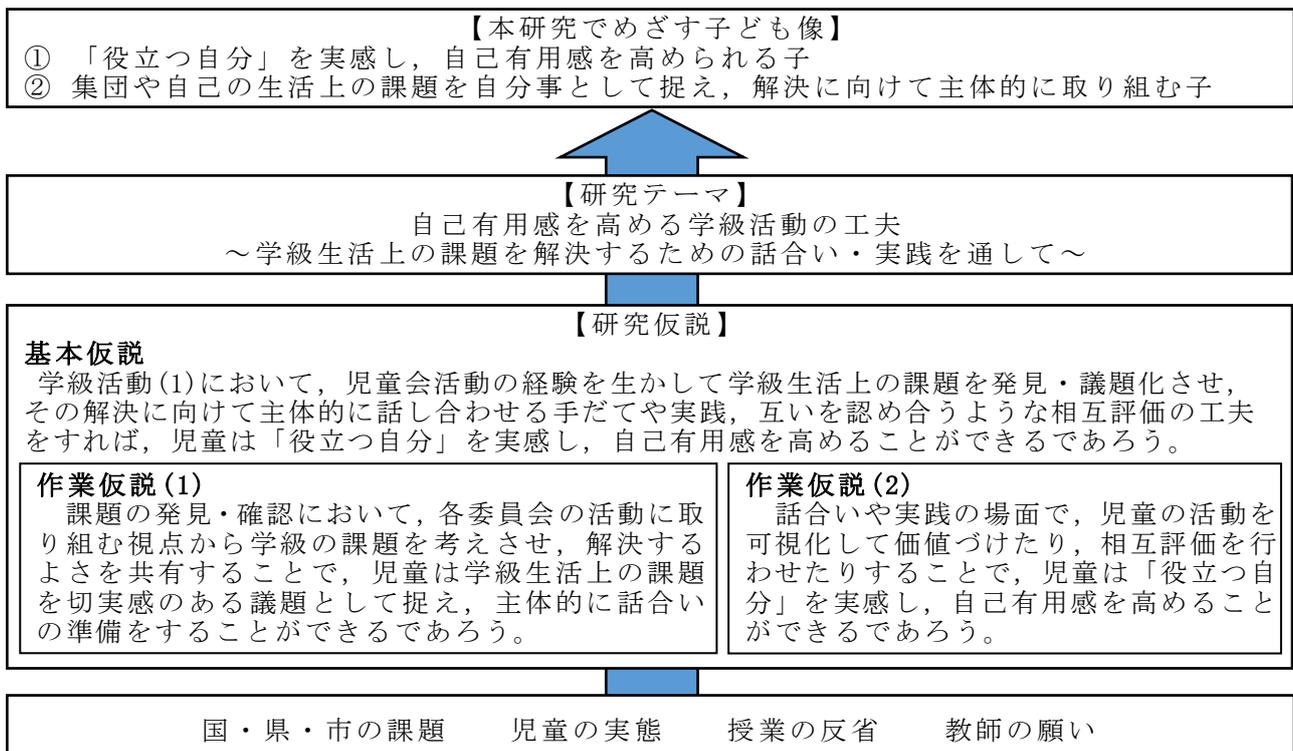
学級活動(1)において、児童会活動の経験を生かして学級生活上の課題を発見・議題化させ、その解決に向けて主体的に話し合わせる手だてや実践、互いを認め合うような相互評価の工夫をすれば、児童は「役立つ自分」を実感し、自己有用感を高めることができるであろう。

#### 2 作業仮説

(1)課題の発見・確認において、各委員会の活動に取り組む視点から学級の課題を考えさせ、解決するよさを共有することで、児童は学級生活上の課題を切実感のある議題として捉え、主体的に話合いの準備をすることができるであろう。

(2)話合いや実践の場面で、児童の活動を可視化して価値づけたり、相互評価を行わせたりすることで、児童は「役立つ自分」を実感し、自己有用感を高めることができるであろう。

### Ⅳ 研究構想図



### Ⅴ 研究内容

#### 1 自己有用感を高める学級活動

##### (1)自己有用感とは

北島は、『自己有用感 ー生きる力の中核ー』(1999)の中で、自己有用感とは、「自分の属する集団の中で、自分がどれだけ大切な存在であるかということをも自分自身で認識すること」と述べている。「生徒指導リーフ 18」(2015)には、「自己有用感とは、人の役に立った、人から感謝された、人から認められたなど、自分と他者(集団や社会)との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対

する肯定的な評価」と記載されている。また、自分に対する他者からの評価が中心のものであり、相手の存在なしには生まれてこないことや、社会性の基礎となるものであること、その育成のために異年齢の交流が有効であることも示されている。

自己有用感を高めるには、児童に家族や遊び友達、学級集団など、他者との関わりを通して、「認められた」「ほめてもらえた」「励ましてもらえた」という実感をもたせることが必要であることから、学級においては、他者に認めてもらえるような活動を友達と協力してやりとげることや、互いに肯定的な評価を重ねることで自己有用感を高めることができると思う。

そこで、本研究では、学級生活を向上させるために学級全員でできる取組について話し合い、協力して実践することで、互いの活動を認め合えるようにする。その際、学級生活を向上させる取組に主体的に関わることが、自己の成長につながることを確認し、活動の意欲を高めたい。また、その取組を子ども園の園児や保護者に紹介するなど、他者から認められる場を設定することで、児童に「役立つ自分」を実感させ、自己有用感を高められるようにしたい。

## (2) 自己有用感を高める学級活動について

『小学校学習指導要領解説特別活動編』には、学級活動(1)の指導において、「個々の児童の思いや願いを理解し、一人一人が当該学級集団に所属し、集団の一員として認められているという満足感や充実感、連帯感などをもち、互いに協力する中で自己有用感を高めることができるように配慮する」とある。

本研究では、問題の発見・確認(図1-①)において学級生活上の課題を切実感のある議題とする工夫(作業仮説1)と、話し合い・実践(図1-②～⑤)において活動の可視化や相互評価の工夫(作業仮説2)を行う。それらを一連の学習過程(図1)として設定し、意図的・計画的な指導を行うことで、児童の主体的な実践を促しながら、自己有用感を高められるようにしたい。

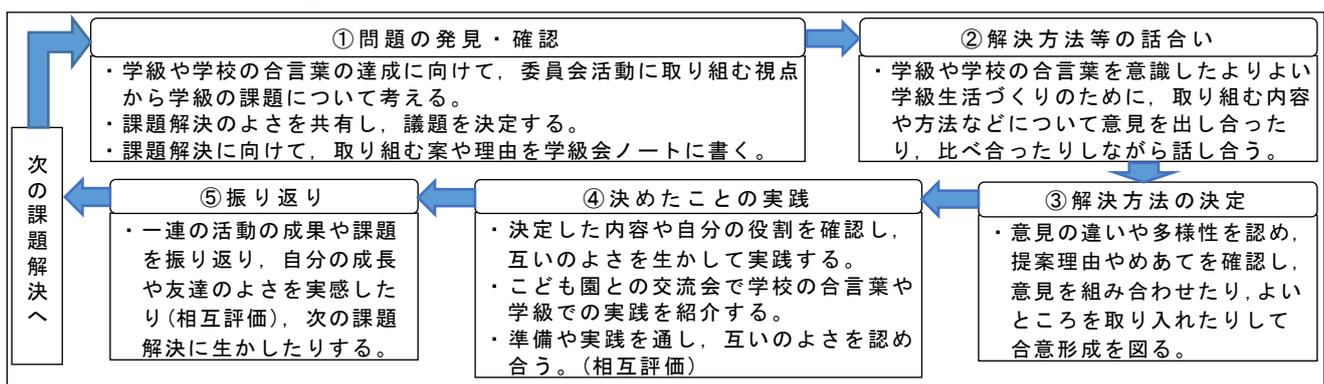


図1【本議題における学習過程】

具体的には、学級全員で達成を目指す「学級の合言葉(図2)」と、全児童が学校生活上の指針としている「まつがわっ子の合言葉(図3)」に向けて、学級生活上の課題を見つけ、学級でできる取組について話し合っ

て実践する。その際、これまでの学級活動において課題となってきたのが、児童が学級生活上の課題を自分事として捉え、その改善に向けて主体的に実践していくことである。そこで、委員会活動の

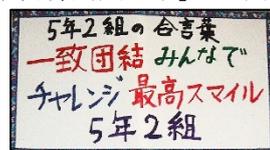


図2【学級の合言葉】

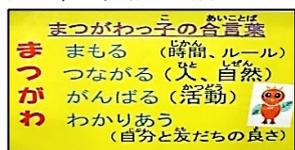


図3【まつがわっ子の合言葉】

経験を生かして学級生活上の課題を発見させることや、課題を解決して合言葉の達成に近づく取り組みをこども園の園児に紹介する交流会を設定することで、児童の主体的な取組が展開できるように支援する。また、交流会後には、園児からの感想や保護者の声を共有したり、児童同士での相互評価を行ったりすることで、児童が「役立つ自分」を実感できるようにしたい。

## 2 学級生活上の課題を解決するための話し合い・実践

### (1) 学級生活上の課題を切実感のある議題にする工夫について

学級活動(1)の内容に、「学級や学校における生活上の諸問題の解決」があり、小学校学習指導要領解説特別活動編で、「児童が学級や学校における生活の充実と向上を図るために、そこで生じる人間関係や生活上の様々な問題について、協力して自主的、実践的に解決していこうとする活動」と説明されている。基本的には、議題箱や朝の会や帰りの会、日記などの児童のつぶやきなどから議題を見だし、解決に向けて合意形成し、協力して取り組むことが考えられる。

本校では、児童会活動において、高学年の児童が児童会テーマ(図4)や目指す学校の姿(図5)に向け、各委員会でも活動のめあてを持って取り組んでいる。そこで、本研究においては、児童が各委員会の活動に取り組む視点から捉えた学校の課題を、自分たちの学級に置き換えて考えさせることで、学級生活上の課題に気付けるようにしたい。また、学習発表会の取組と関連させ、「もうすぐ最上級生」という意識を高めながら、「高学年らしい姿」のイメージを共有し、学級をよりよくするための課題について考えさせる。そうすることで、児童はこれまで気づけなかった学級生活上の課題を意識するようになり、見つけた課題を自分たちの事として捉え、切実感のある議題とすることが



図4【児童会テーマ】



図5【目指す学校の姿】

できると考える。

### (2) 課題を解決するための主体的な話し合い・実践にする工夫について

学級活動(1)における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導の工夫・改善について、安部(2017)は、「議題についての提案理由を基に、一人一人の思いや願いを大切にしながら意見を出し合い、共通点や相違点を確認したり、分類したり、共通の視点をもって比べ合ったりするとともに、よりよいものを選んだり、意見の違いや多様性を生かしたりして学級としての考えをまとめたり決めたりして『合意形成』を図るようにすること」と述べている。

学級生活上の課題を主体的に解決するためには、事前に提案理由や活動の意義を確認して児童の問題意識を高めることや、児童が取り組みたくなるような学習過程を設定し、見通しを持たせ、一人一人に思いや願いを持たせる必要があると考える。

本研究においては、実践場面や実践後の自分たちの姿を具体的にイメージさせて話し合わせるために、学級生活上の課題に関するアンケート結果や提案理由、話し合うことなどを学級活動コーナーを活用して共有し、児童が自分の意見を準備できるようにする。また、事後の活動として、年間を通して関わっているこども園との交流会を設定する。交流会で園児に「まっがわっ子の合言葉」やその達成に向けて

学級で取り組んでいることを紹介する場を設けることで、児童の「紹介できる取組にしよう」という気持ちを高め、主体的な取組となるようにしたい。

### (3) 「役立つ自分」を実感するための相互評価について

『特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)』(2019)には、「学級活動(1)を中心とした自発的、自治的な活動を通して、児童が互いに協力し合い認め合う中で、自分が他者の役に立つ存在であることを実感し、自分のよさや可能性を発揮して自信をもつように」なることや、「振り返りにおいても、自分や友達のがんばったことなどを認め合ったり教師からその成長を称賛されたり」することで、「自分が仲間から必要とされていることや役に立っていることを実感し、自己有用感が高まって」いくとある。

本研究では、児童が互いを認め合い、「役立つ自分」を実感できるようにするために、本時や事後の活動を通して表1のような「価値づけ」を行う。本時においては、学級会ノートに設けた「わかりあいメモ」の欄に、めあてに迫る発言や参加態度など、気づいた友達のよさを記述させ、授業の終末で数名に発表させる。授業後には、教師が児童の記述を価値づけるコメントを書いて返却する。さらに、記述内容を一覧表にして掲示し、共有化を図ることで、自分では気づかなかつた発言や態度のよさに気づいたり、新たな視点から友達を認めたりできるようにする。事後においては、本議題に関する一連の活動を通して、児童が「成長した」「協力した」「がんばった」ところを互いに評価できるように、学級の合言葉や活動のめあてに照らし合わせて振り返る。その際、自分自身が成長したと思うことや、友達の変容、園児との交流会で頼りになった行動などについては具体的に記述できるようにする。また、園児からの感想を聞いたり、こども園の様子を見たりすることで、「役立つ自分」を実感できるようにするとともに、児童の自主的・実践的な活動を維持できるようにしたい。

	評価の手だて	対象
本時	①わかりあいメモ ②発表	児童⇄児童 児童⇄児童
事後	③コメント記入 ④一覧表の掲示 ⑤園児の声・手紙 ⑥保護者の声かけ ⑦振り返りカード	教師⇄児童 児童⇄児童 園児⇄児童 保護者⇄児童 児童⇄児童

表1【本研究における相互評価】

### 3 話し合い活動における思考ツールの活用について

杉田(2013)は、自治的な話し合いの充実に向けて、「話し合いの可視化」を挙げ、「合意形成するための道具としての各種ワークシートや学級会グッズ」など、ツールの開発について述べている。また、「特別活動指導資料」には、思考ツールを活用することで、それぞれの意見のよさや達成方法の違いを明確にし、比較や決定のための基準を明らかにすることができるように示されている。本研究では、事前の活動において、ピラミッドチャートを用いて「実現可能か」「めあてを達成できそうか」について考え、実践する案を絞り込む。本時においては、提案理由キーワードを色短冊に書き出し、児童の発言内容に合わせて同じ色の賛成マーク(図6)を貼ったり、意見を短くまとめて板書したりすることで、話し合いの状況を可視化できるようにする。また、話し合いの中心となっている案について、焦点化して比べる必要がある場合には、それぞれの特徴を「同じところ・似ているところ」と「違うところ」に分けて比較し、活動のめあての達成に向けて、有効な意見を絞り込めるようにする。

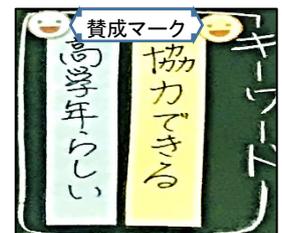


図6【キーワードと賛成マーク】

## VI 授業実践（第5学年）

### 1 議題名

「まっがわパワーアップ作戦に取り組もう ～『まっがわっ子の合言葉』の実行～」

### 2 議題選定の理由

本議題は、児童の「学級・学校の合言葉の達成を目指し、高学年らしくパワーアップしたい。」という思いから選定された。児童の主体的な取り組みを促すために、活動のよさを共有して話し合い・実践するとともに、本議題での実践や学校の合言葉を、こども園の園児に紹介する交流会を設定する。また、本議題を通して、児童が「役立つ自分」に気づき、自己有用感を高められるように、多様な他者から認められるような相互評価の工夫を行う。

### 3 事前から実践・振り返りまでの取組

実施日	時間	内容	対象
12月9日(月)	朝の活動 委員会活動	学級活動アンケートに学級生活上の課題を記入する。 学級や学校の生活を向上させる取組について調査する。	学級全員
12月12日(木)	帰りの会 放課後(宿題)	議題を選定し、活動計画を立てる。議題を知らせ、承認を得る。 日記に取り組むことの案を書く。	計画委員会 学級全員
12月13日(金)	昼休み 放課後(宿題)	めあてを確認し、ピラミッドチャートを活用して案を絞り込む。 学級会ノートに自分の意見や必要な役割などを記入する。	計画委員会 学級全員
12月17日(火)	放課後	全員の学級会ノートに目を通し、進行や板書の確認をする。	計画委員会
12月18日(水)	学級活動	(1)議題名「まっがわパワーアップ作戦に取り組もう」	学級全員
12月20日(金)	朝の活動	役割分担を行い、必要な準備を始める。	学級全員
12月23日(月)	朝の活動	決まったこと取組方法を確認し、実践を始める。	学級全員
1月17日(金)	学級活動	こども園との交流集会で「まっがわっ子の合言葉」を紹介する。 交流集会后、「まっがわパワーアップ作戦」の振り返りを行う。	学級全員

### 4 本時の展開

#### (1) 本時のねらい

学級や学校での生活をよりよくするために、「まっがわっ子の合言葉」を具現化する方法について互いの意見を認め合い、よさを生かしながら合意形成することができる。

#### (2) 授業仮説

①意見を比べ合う場において、それぞれの意見をその特徴に合わせて分類・整理したり、焦点化して比べ合ったりすれば、考えの違いやよさに気づき、実践を具体的にイメージして話し合うことができるであろう。
②意見をまとめる場において、提案理由キーワードや賛成マークの色、決まっていることを確認し、今後の見通しを持たせる助言を行えば、それぞれの意見のよさを生かした合意形成を図ることができるであろう。

#### (3) 展開

話し合いの順序	指導上の留意点(○教師の手立て □予想される児童の反応)						
1. 提案理由やめあての確認 <b>めあて</b> 「まっがわっ子の合言葉をみんなで協力して取り組み、頼れる5年生になろう」	<b>提案理由</b> キーワード・・・「協力できる」「高学年らしい」 <table border="1"> <thead> <tr> <th>今の学級</th> <th>すること</th> <th>目指す学級</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>元気も笑顔もあるけど、時間を守れなくて困ることや廊下を走ってしまう人もいる。学校全体ではケガも増えている。</td> <td>「まっがわっ子の合言葉」を学級のみんなで<b>協力して実行する。</b></td> <td>もっといい学級になる。高学年らしく<b>パワーアップ</b>する。こども園の園児に「まっがわっ子の合言葉」を教える。</td> </tr> </tbody> </table>	今の学級	すること	目指す学級	元気も笑顔もあるけど、時間を守れなくて困ることや廊下を走ってしまう人もいる。学校全体ではケガも増えている。	「まっがわっ子の合言葉」を学級のみんなで <b>協力して実行する。</b>	もっといい学級になる。高学年らしく <b>パワーアップ</b> する。こども園の園児に「まっがわっ子の合言葉」を教える。
今の学級	すること	目指す学級					
元気も笑顔もあるけど、時間を守れなくて困ることや廊下を走ってしまう人もいる。学校全体ではケガも増えている。	「まっがわっ子の合言葉」を学級のみんなで <b>協力して実行する。</b>	もっといい学級になる。高学年らしく <b>パワーアップ</b> する。こども園の園児に「まっがわっ子の合言葉」を教える。					
2. 決まっていることの確認	○決まっていることを確認する。 ①毎日取り組み、毎週金曜日に振り返りをする。 ②実践をこども園との交流会（1月17日授業参観日）で紹介する。						
3. 教師の話	○これまでの活動や学習発表会の様子を映像で振り返り、「パワーアップ」や「高学年らしい」の言葉に込められた思いを確認する。 ○本議題に取り組む意義を確認し、話し合いや実践に向けての意欲を高める。						

<p>4. 話し合い (1) 話し合うこと① 「どんな取組をするか」</p>  <p>(2) 話し合うこと② 「園児にどのように紹介するか」</p>	<p>○提案された活動を短冊に書いて掲示しておき、比べ合う話し合いから始める。 □次の時間の準備をしてから休み時間にする □呼びかけポスターをかいて掲示する □パトロール隊がチェックする □みんなが守れた日にビー玉貯金をする □ワークスペースに中央線を引いて右側通行 ○それぞれの意見を、かかる時間や活動の特徴から分類・整理する。 ○必要に応じて、めあてや提案理由を確認し、話し合いの目的を意識させる。 ○話し合いの中心になる案について焦点化して特徴を比べ、全員が納得してから進められるように助言する。<b>☆授業仮説①「比べ合い」</b> ○話し合いを振り返って賛成・反対の理由を確認させ、めあてを達成できそうな案を選ぶように助言する。<b>☆授業仮説②「よさを生かした合意形成」</b> □紙芝居にする □歌にする □クイズを作る □寸劇にする □ダンスにする □カルタにする ○準備期間や紹介方法について、具体的に考えられるように助言する。 ○自治的活動の範囲を超えそうな場合は、適切に助言する。</p>
<p>5. 決まったことの発表 6. 話し合いの振り返り 7. 教師の話 8. おわりの言葉</p>	<p>○決まったことや参加態度について発表させ、実践に向けて意欲を高める。 ○よかった点や課題について自己評価し、友達よかった点などについても評価できるようにする。<b>★作業仮説(2)「相互評価」</b> ○合意形成したことへの価値づけや今後の見通し、計画委員会へのねぎらいなどについて話す。</p>

## Ⅶ 結果と考察

### 1 作業仮説(1)の検証

課題の発見・確認において、各委員会の活動に取り組む視点から学級の課題を考えさせ、解決するよさを共有することで、児童は学級生活上の課題を切実感のある議題として捉え、主体的に話し合いの準備をすることができるであろう。

#### 【結果】

本研究の議題選定では、児童が学級生活上の課題を切実感のある議題として捉え、主体的に話し合いの準備をすることができるように、委員会活動に取り組む視点を生かして、客観的な立場から学級の課題について考えさせた。保健委員の児童から「去年よりケガが増えている」、給食委員の児童から「給食の準備・片付けが時間内に終わらない」、美化・環境委員の児童から「教室が散らかっている」「トイレスリッパがそろえられていない」など、学級全員で多くの課題に気づくことができた。これらの課題を計画委員会で「個人でできること」「各委員会で引き取れること」「学級で取り組んだほうがいいこと(図7)」に分けたことで、学級全体として取り組むことが明らかになった。そこで、事前のアンケート結果や児童がイメージする「高学年らしさ」を視点を、全員で12月の議題選定を行った(図8)。児童の「高学年らしくパワーアップしたい」という思いから、学級の合言葉のキーワード「一致団結」を目指した集会活動と、学級生活上の課題解決に向けた取組を1つずつ行うこととなり、生活課題については、「時間を守る」「廊下を走らない」ための取組を行うことが決まった。その際、児童の発言から、「学級や学校の合言

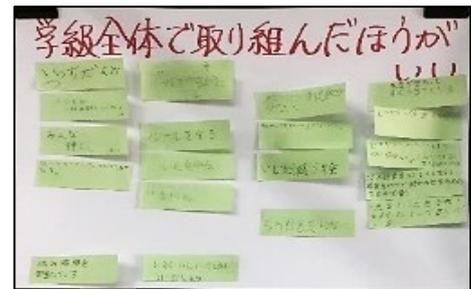


図7【学級で取り組む課題を明確化】

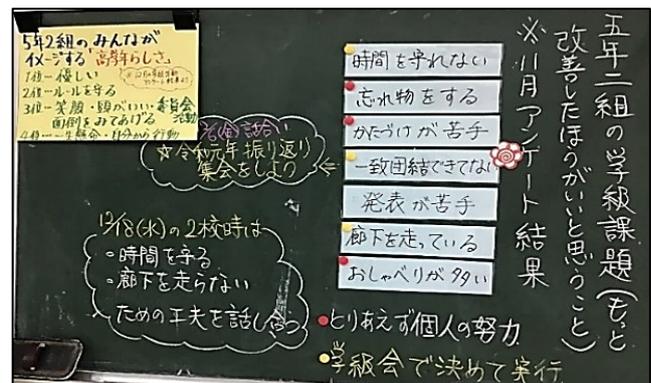


図8【学級の課題と照らし合わせて議題を決定】

業達成に近づき、自分自身の成長に繋がる」という活動のよさを確認し、全員で共有することができた。また、計画委員会から、1月に計画されている園児との交流会で、学級・学校の合言葉や本議題の実践を紹介する提案をし、全員の承認を得た。T児は「俺たちもちゃんとやらないといけないな」と発言し、自分の行動を振り返っていた。取組案についての日記には、呼びかけポスターの制作やパトロール隊の結成、ビー玉貯金など9つの案が挙げられた。計画委員会では、ピラミッドチャート(図9)を使って「実現可能か」「めあてを達成できそうか」について考え、絞り込みを行った。絞り込まれた5つの案から、「廊下に線を引いて右側通行を徹底する」や「1年生でもできるように、次の学習の準備をしてから休み時間にする」など、全員が学級会ノートに自分の意見や具体的な取組方法を書き込むことができた。

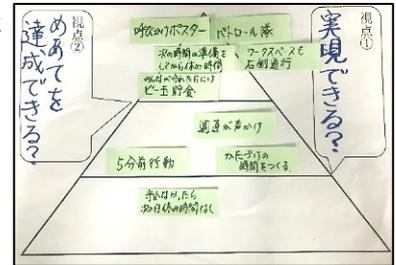


図9【本議題のピラミッドチャート】

### 【考察】

課題の発見・確認において、委員会活動に取り組む視点から自分の学級の課題を考えたことで、児童はこれまで気づかなかった学級の課題に気づくことができた。また、その課題を整理し、解決に取り組むよさを確認したことで、切実感のある議題として捉えることができたと考えられる。さらに、園児に合言葉を紹介する交流会を設定したことは、児童の発言にあったように、自ら合言葉の達成や、高学年らしい行動を心がけようとする意欲に繋がり、より具体的で実践可能な取組について考えるための手だてになったと考えられる。

以上のことから、各委員会に取り組む視点から学級の課題を考えさせ、解決するよさを共有したことは、児童が学級生活上の課題を切実感のある議題とし、主体的な取組にすることを有効であったと考察する。

## 2 作業仮説(2)の検証

話し合いや実践の場面で、児童の活動を可視化して価値づけたり、相互評価を行わせたりすることで、児童は「役立つ自分」を実感し、自己有用感を高めることができるであろう。

### 【結果】

本時から実践においては、児童が「役立つ自分」に気づいたり、実感したりできるように、児童の活動を可視化して価値づけたり、相互評価を行わせたりする工夫を行った。話し合いの導入場面では、教師の話でこれまでの学校生活や学習発表会の様子を映像で振り返るとともに、本議題に取り組むよさや自分たちの「なりたい姿」を確認した。展開の場面では、意見の内容を捉えやすくするために、黒板記録が案の短冊を移動させたり、線をつないだりして整理し、提案理由キーワード「高学年らしい」「協力できる」に合わせて色分けした賛成マークを貼った。また、他の案とは異なるよさを縦型の短冊に書いて貼り出し、話し合いの流れが見えるように板書の工夫(図9)をした。児童は、呼びかけポスターの案に対する疑問点や改善策、パトロール隊との組み合わせは可能かについて焦点化して話すなど、キーワードやめあてを意識して話し合った。T児の「パトロールして守らせるのは高学年らしくない(表2※1)」という発言やR児の「みんなができた時にビー玉貯金をしてはどうか(表2※2)」という提案から、「呼びかけポスター」「パトロール・ビー玉貯金」の案に合意形成することができた。相互評価のために設けた学級会ノートの「わかりあいメモ(図10)」には、「Aさんが、みんなのことを深く考えてわかりやすく発表していた」「Rさんはうなずきながら聞いていたし、Mさんは自分と違う意見も取り入れていた」などが書かれていた。

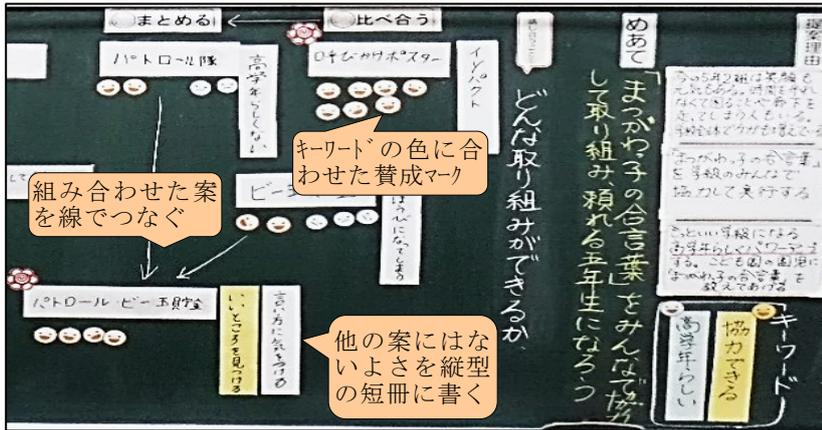


図9【本時の板書より】

表2【児童の発言より】

A児：ポスターを自分でかいたら「守ろう」  
 っていう気持ちが高まる。  
 K児：でも、かいて終わりになるかも。  
 I児：インパクトのあるポスターにしよう。  
 M児：ポスターをかいて、パトロール隊が声  
 をかけたらいいと思う。  
 T児：パトロールして守らせるのは高学年  
 らしくないと思う。※1  
 N児：いいところ見つけのパトロールにし  
 たらいいと思う。  
 R児：いいところ見つけのパトロールなら、  
 「時間を守る」や「廊下を走らない」  
 ができたらビー玉貯金して確認でき  
 るようにしたらいい。※2  
 司会：ポスターとは別の案として・・・

また、「わかりあいメモ」の記述を一覧表にして掲示したことで、児童が自分の参加態度に対する客観的な評価を確認することができた。

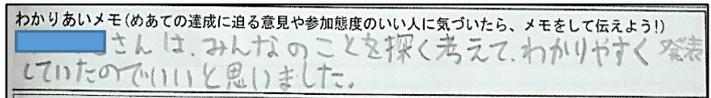


図10【わかりあいメモの記述】

事後には、3人組で作成した「呼びかけポスター(図11)」を紹介・掲示し、「時間を守る」「廊下を走らない」について、毎週児童が自己評価し



図11【呼びかけポスター】



図12【ビー玉貯金】



図13【劇で合言葉を紹介】

た結果を「ビー玉貯金(図12)」で確認できるようにした。こども園との交流会では、「まっかわっ子の合言葉」や、その達成に向けて自分たちが取り組んでいることを劇で紹介した(図13)。交流会の様子を参観していた保護者には、担任から取組の趣旨を説明し、児童が取り組んできた実践を称賛してもらった。交流会の振り返りカードには、頼りになった友達の行動や発言、学級生活上の課題を解決するために頑張ってきたことなどが書かれていた(表3)。後日、こども園でも合言葉を作って取り組んでいることを園児から聞き、自分たちがお手本になっていることを知ったR児は嬉しそうな表情で「まだ、たまに走ってしまうけど、いつでも歩くようにする!」と発言し、活動の継続に意欲を高める様子が見られた。また、「もっと完ぺきに時間を守るようにしたい」という振り返りもあった。

表3【交流会の振り返りカードの記述より】

- ・Yさんが工夫してかざりつけをしたり、セリフを考案したりして、積極的に取り組んでいた。
- ・劇の準備をしている時、園児が少しうるさくなかったけど、Aさんが「これから劇が始まるから見てね」と言って説明もしていた。
- ・時間を守ること、廊下を走らないことに気をつけてきたし、園児に合言葉を紹介できてよかった。

本議題の事前から事後の活動までを通して、学級生活上の課題解決や「役立つ自分」の実感についての振り返りをさせたところ、結果は以下ようになった(表4)。感想には学級の課題が改善された充実感や自分の成長、新たな課題解決への意欲に関する記述が多かったが、特に変容がないと振り返る児童や、本議題と「役立つ自分」の繋がりについての理解や実感が十分ではない児童の感想も見られた(表5)。

表4【個人の成長や自己有用感に関するアンケート調査結果より】

調査項目	10月	1月	変化
1. 学校生活で時間を守って行動することができる。	45%	78%	+33%
2. 廊下を走らずに休み時間をすごしたり教室移動したりしている。	53%	87%	+34%
3. 学級や学校のために行動でき、役に立っていることがある。	57%	70%	+13%

表5【「まっがわパワーアップ作戦」の感想】

- ・みんなが時間を守って行動するようになって、授業や給食の始まりが早くなってよかった。
- ・前はまっがわっ子の合言葉を意識していなかったけど、みんなできるようになってきた。
- ・Mさんたちは積極的に行動してみんなの役に立っていたけど、自分はあまり活やくできなかった。
- ・「時間を守る」と「廊下を走らない」はできているけど、役に立っているかどうかはよくわからない。

**【考察】**

話し合いにおいて、児童の発言を賛成マークや色短冊を用いて可視化し、価値づけたことで、児童はよりよい案を具体的に考えて合意形成することができた。学級の課題解決に向けた実践を振り返り、ビー玉貯金をしたことも活動の可視化、価値づけとなった。アンケートの調査項目1, 2の結果や感想からは、児童が「時間を守る」「廊下を走らない」を意識して行動を改善していることがわかる。このことは、児童が授業開始に間に合うように声をかけ合って移動する様子や、給食準備時に役割分担をして素早く取り組む姿からも見取ることができる。また、調査項目3では、「役立つ自分」に気づいたり、実感したりしている児童の増加が確認でき、「わかりあいメモ」や振り返りカードを活用して相互評価をさせたことが、児童の気づきや、実感を促したと考えられる。その一方で、本議題の実践と「役立つ自分」のイメージが重ならなかつたり、目立つ友達と比較したりして、自己有用感の高まらなかった児童もいることから、さらに継続的な価値づけの工夫や、児童が「役立つ自分」をより実感しやすい実践を重ねる必要があると考える。

以上のことから、児童の活動を可視化して価値づけたり、相互評価を行わせたりすることは、児童が「役立つ自分」を実感して、自己有用感を高めることに繋がったと考察する。また、児童の「役立つ自分」のイメージを具体化・共有化し、児童の実態に合わせた実践を重ねることで、さらに自己有用感を高めることができると考える。

**Ⅷ 成果と課題**

**1 成果**

- (1) 委員会活動の経験から学級生活上の課題を見つけ、解決するよさを共有したことで、児童が切実感を持って議題化し、主体的な話し合いや実践にすることができた。
- (2) 課題の解決に向けて、児童が協力して取り組む学習過程の工夫や相互評価を行ったことで、互いを肯定的に評価することができ、自己有用感を高めることができた。

**2 課題と対応策**

本議題の実践と「役立つ自分」のイメージが繋がらなかった児童や、友達と比較して自己有用感が高まらなかった児童もいたことから、「役立つ自分」のイメージを共有したり、自分自身をより客観的に振り返らせたりする工夫が必要である。そのために、学校行事や他教科等との関連を図ることや、目指す学級の姿に近づくための様々な議題に継続的に取り組む必要がある。

**《主な参考文献・引用文献》**

『小学校学習指導要領解説 特別活動編』	文部科学省	東洋館出版社	2018
『みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動』（小学校編）	文部科学省／国立教育政策研究所	教育課程研究センター	文溪堂
『自己有用感 一生きる力の中核―』	北島貞一	田研出版株式会社	1999
『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の指導技術』	杉田洋	小学館	2013